

『一途なペットの愛し方』

著：皐月美雨

ill：影木栄貴

剣人様は、まだ涙のとまらないボクを、じっと見つめた。

「おい、ザック。俺のほうが被害者のはずなのに、なんだかこいつを見てると、たまらない罪悪感が押し寄せてくるんだが、俺、なんか悪いことしたのか？」

『してるじゃないか。自分の欲望のために、アニマロイドをオーダーしたんだろ？ それだけで、十分に罪深い』

「それは、そうだけど、だったらザック、おまえも、罪悪感に……苦しんで……なんていないだろうな、その様子じゃ」

ザックさんは女の子三人と、楽しそうにロボマウスキャッチゲームをしている。

『ああ、俺は罪なんて感じてない。なぜなら、三人を平等に愛してるからね。アニマロイドは、人間と違って、感情豊かな生き物だ。情緒とか情感とか、我々が失ってしまったものをたくさん持ってる。それをうまく育てるのも、アニマロイドと暮らす楽しみだよ』

「冗談じゃない。この俺に、父親役をやれってのか？」

『父親ってのは、もっと難しいだろ。どうやって金持ちになるかとか、人に騙されない生き方なんてものも、教えないといけないんだから。アニマロイドに教えてやるのは、愛される悦(よろこ)びだけでいいんだ』

「そんな面倒なのはきらいだ……それより、泣いてる。泣きやまないんだ。どうすればいい』

『簡単さ。ハグしろ』

見本を見せるつもりなのか、ザックさんはアニーを優しく抱き締める。するとアニーは、ザックさんの鼻の頭をぺろんと舐めていた。

「ハグって……こいつをか？」

『セックスするときの抱き方とは違うぞ。優しくだ。そして頭を撫でてやれ。キスしてもいい。ただしディープなのはだめだ』

「もういい、わかった。好きなだけ、ゲームやってろ」

また指を鳴らして、剣人様はモニターを切り替えた。そしてソファの背に腕を乗せて、がっくりって感じで頭を後ろに下げている。

「魔が差したってのは……こういうのを言うんだな。人間の女とも、まともに付き合えない俺が、なんだってアニマロイドなんて飼う気になったんだらう……」

剣人様、もう怒ってないみたい。

だけどボク、まだ涙が、とまらない。

「泣くなって。ああ、わかった、こっちにこい。俺の横に……座るのを許す」

本当にいいのかな。

ボクはおそろおそろ、剣人様の隣に移動した。

剣人様は黙って、ボクの肩を抱いた。途端にボク、いろんな気持ちがごっちゃになってしまって、また大泣きしてしまった。

「泣くなって、こらっ、泣くんじゃない」

初めて、剣人様に触れたんだ。
暖かいな。そしていい匂いがする。
ずっとこうして、くっついていたいな。
だってボクのご主人様なんだもの。
「それ以上泣くと、今すぐ追い出すぞ」
剣人様はボクの頬に手を添えて持ち上げると、じっとボクを睨(にら)み付けて脅した。
「ご、ごめんなさい」
「ティッシュ、持ってこい」
その声に、部屋の隅からメイドロボットがすごい速さで転がってくる。一メートルの完全球体なんだけど、側に来ると手足がずっと出てきた。
最新式のメイドロボットは、まん丸な体の中から柔らかいウェットティッシュを、さっと取り出して剣人様に渡した。
「おかしな感じだ。美有樹とそっくりなのに……俺は、美有樹の泣き顔なんて見たことない」
そう言うと、剣人様はボクの顔を拭いてくれ始めた。
「顔だけは……好みなんだけどな。乳はないし……こんなガキだと思わなかった」
「……」
ああ、もうがまんできないよ。
ボクは剣人様に抱き付いてしまった。
こういうことしたがるのは、アニマロイドの本能なんだもの。
剣人様……いい匂い……体、がっしりしてるの。くにかくにやしてない。
膝の上で寝たいな。それとも抱っこしてくれてもいいんだけど。
もっともっと剣人様に触れたい。
嫌われてても、ボクはご主人様が大好き。
「懐(なつ)くな。懐いたからって、俺が優しくなるなんて思わないことだ」
なのに剣人様はボクを突き放し、汚れたティッシュを投げ捨てた。それをメイドロボットがキャッチして、パクンと口の中に放り込む。
「ボロ、食事にしろ。アニマロイド用ミルクを忘れるな。俺にはビール。メニューは、そうだな。俺はステーキ……」
ソファから立ち上がった剣人様は、ボクを見ないで訊いてきた。
「おまえはなにを食べるんだ？ 魚しか食べないのか？」
「なんでも、食べられます……」
「じゃあ、なにが好きなんだ？」
「……アイスクリーム」
「そりゃ飯じゃない。ああ、もうなんでもいいや。こいつにはフライフィッシュとアイスクリームだ」
この家のメイドロボットは喋(しゃべ)らない。一つしかない青い目が赤くなったら、わかったってサインみたい。
「ボクの部屋は、どこですか？ ご主人様……一人で食事したいでしょ？ ボク、自分の部屋で食べます」
「部屋？ 好きなのどこにいればいいだろ。俺が仕事してるときに、邪魔しなければどこにいても構わない」

「食事は？ いっしょでもいいんですか？」

「勝手にしろ」

また怒ったのか、剣人様はリビングルームを出て、自分の部屋に入ってしまった。

一人になると、ボクにはもうすることがない。だから窓に近づいて、ぼんやりと外を見ていた。

「あれ？ テニスコートとバスケットコートがある」

何軒か並んだ家の真ん中には、それ以外にプールもある。ボクはあんまり泳ぐの好きじゃないけど、犬型のアニマロイドだったら大喜びしそうだな。

「ねえ、あれは、ここの住宅地の共用施設なの？」

メイドロボットのボロに訊くと、目がフワーンと赤く光った。

「アニマロイドでも使える？」

またフワーンと赤く光る。

「君は喋らないの？」

するといきなり壁のモニターに、文字が映った。

『ミスター・葉月は、余計なお喋りがお嫌いらしく、私の発声機能は停止されております。ですが、私、本来は大の話し好きです。どうやら私のプログラマーが、そういった性格だったようです』

「それじゃ、ボクとはお喋りして。声が出せないなら、こうやってモニターでお喋りしよう」

『はい、喜んで。ミスター……いえ、ミュウ様』

「様はいらないの。ミュウでいいよ。だってボクらは、同じように人間に作られたものなんだから」

友だちがいてよかった。そうじゃないと、ボク、寂しさで死んでしまったかもしれない。

「ボロは、することがいっぱいあっていいね。ボクの仕事は、ご主人様を慰めることなのに、どうやらボク、嫌われちゃったみたい」

『それはお気の毒です。でも、人間の感情は一貫性がありませんから、また気が変わることもあると思いますよ。特にミスター・葉月は、気まぐれな方ですから』

「そうかな……」

本文 p39～46 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>